

## 10月14日の感想

講師が述べていた、神楽は全国各地でそれぞれ違っていて、これが神楽だというのは目で見て帰納的に判断するしかない…という見解は分かる気がします。20年近く前に、母と行った大迫町主宰の「神楽ツアーア」で見た早池峯神楽(岳神楽大償神楽)。

東北の秋の夜気の中、神社の神楽殿や伝承する山伏の家で舞われる神楽には本当に感激しました。それは、何となくイメージしていた武州近辺の「神楽」とは全く違うリズムと動きでした。それから私は興味を持って神楽のそれぞれの違いを見るのが楽しみになったように思います。

春、秩父に桜を描きに行った時、たまたま祭りでやっていた、眠気を誘うような神楽…そんなにじっくり見ていていた訳ではないけど強く印象に残ります。

浜辺で舞われる石見神楽を見に行った時は、残念ながら天気が悪くて体育館のようなところで見ましたが、これは本当に派手なエンターテイメントになっていて…ヤマタノオロチから火煙!?が出たり、カラフルで…まあ面白かったです。

昨日の相模里神楽は、本来の神事としての姿の厳かな形と、芸能として現在を生きようとする神楽の在り方の両方を見られ、考えさせられました。方向は逆ですが、どちらも体の使い方や装束等、洗練されていて美しい！

新作は日舞の動きやベリーダンスの扇などの工夫も華があって良かったですし、即興で客を引っ張りこむのも面白かったです。

さて、絵描きとしてですが私はやはり、舞い手の所作やそれに伴って現れる装束の形と動きが好きです。また、舞われる場が空間として清らかで美しいことに惹かれます。どのような形でも、残して伝えて欲しいと思います。なるほどそのためには職業として「プロ化」していくしかないのか…と理解できました。

ただ、やはり絶対変えられないのは、神楽は「神事」であるということですね。やはりホールの舞台芸術や観光客向け施設のショーとしてではなく、本来舞われるべき時と場で演じられる神楽が、一番美しいと思います。花の中でゆるゆると…いつ始まっていつ果て

るのか分からぬ、奥秩父の里の神楽みたいな。素朴、という洗練のしかたもあるのだと思うのです。だらだら長くなつてしまふませんでした…。そんな訳で、来週も楽しみにしています。本当に、どうもありがとうございます！

## 21日の講座の感想

21日の講義も大変興味深く受講させて頂きました。いろいろ考えながら帰途につきました。21日は前週よりも実演が更に多く見られ、改めて実感したのは垣澤社中の方々の舞や踊が「身体表現」として素晴らしい洗練されていることでした。寿式三番叟は、大きな動きの中にも細やかな優美さと切れの良さがある。二人囃子など、滑稽な所作にも完成された体の使い方、きちっと型がありその上の自由自在な動きが本当に綺麗で、上品な色気を感じました。垣澤社中はプロの芸能集団であればこそ、単に古い型を受け継ぐのではなく、常により良いものにすべく研鑽を重ね、進歩発展していくのでしょうか。新作も、華があって本当に良くできている、と思いました。また一方、今回はより現代的な演出も多く、コミカルなやり取りに加えハロウィーンなど何でも取り入れてしまう自由な取り組みは、面白いと思う反面いったいこれはどこに向かって行くのと、少し不安になりました。

「芸能化」は分かりますが、コマーシャリズムやテレビ的商業主義？といった大衆迎合の方向へ進むのなら…私は正直、ちょっと冷めます。（そういう「面白さ」は巷に溢れています、私個人としては神楽にそれを求めていません。）といって、前回お話をされていた通り、何も「伝統芸能」などという名称でカテゴライズし、能や歌舞伎みたいに「芸術」として祭り上げるのが必ずしも良いとは思えません。神楽を学術的な研究対象とする方々や、文化行政枠で神楽を扱かおうとしている方々は、何か高尚じみたり、より伝統芸能的なものが維持されている方が好ましいのでしょうか。当事者である垣澤社中の皆さんは、職能的な在り方を模索されていますが、地域のサークル活動のような形態で神楽を継承・維持していく流れもあるなど、神楽（神楽の伝承者）そのものが生き残つてくのは本当に大変なことだということも理解できました。この講座を受けて、神楽が巧み

に国策に取り込まれ、政治の都合を反映・影響されてきたという説明は目から鱗でした。しかし、明治の神仏分離令や神社の合祀令など、国体における「神様」の位置付けを考えれば当然で、靖国や戦時中のことも合点が行きます。また、神職の家柄、神事舞太夫の家柄など、神楽継承には、それに応じた身分があったというのも大変驚きました。（祭りや神楽は民衆のものなのだ、と素朴に信じていたところがあり…。）

他方、先日のNHKドキュメンタリー番組で、津波で壊滅的被害を被った岩手県山田町の祭り（山田八幡宮神幸祭の獅子舞と大杉神社神幸祭の神輿の海上渡御）再開に向かう、祭りの担い手たちの思いを見ましたが、それは本当に祭を担ってきた地元の人たち（プロジェクトではない）の思いが伝わってきて感動しました。本来はやはりこういうものなのでしょうね。前回も書いたかも知れませんが、「素朴」という洗練の方向もあると思うのです。

また、この講座を受け、これまで何となく惹かれてきた「神楽」というものを、実は様々な切り口で考え、見直すことができ、それをすることが単に古いものを大事にするのに留まらず、社会の仕組みや世の有り様などの「今」と「これから」を考える上での指標となるのではないか…などと感じた次第です。

有意義な時間を過ごさせて頂き、どうもありがとうございました。

（S.Aさん・東村山在住）